

地域特産種量産放流技術開発事業（抄録） （大量斃死要因調査グループ）

勢村 均・若林英人・川上勲輝

要 約

1. 施設消毒および防疫措置後のメガイの大量生産

1) 初期餌料の違いによる生残率の差異

4回の量産のうち、幼生投入前に波板上に優占した珪藻類は、1, 3, 4回次は *Nitzschia*, *Navicula* 類、2回次は *Licmophora* 類であったが、各回次とも幼生から稚貝への変態率は10%前後と変わらなかった。また、その後の斃死はほとんどなく、12月以降におこなった中間育成の生残率は各回次とも90%以上であった。

2) 中間育成時の投与餌料の違いによる生残率の差異

生海藻（アラメ）、乾燥ワカメ、配合餌料（ハリオスK, S, コスモ）を投与し、成長と生残を比較した。累積斃死率は1.2-4%であり、生海藻が最も高かった。成長は、ハリオスK, Sが最もよかった。

3) 稚貝の活力の測定および時期別隔離飼育による生残率の差異

3月から7月まで、稚貝の麻酔処理後の回復率や月別の稚貝隔離飼育の生残率を比較したが、今年は斃死がほとんどなかったため、差異は見出せなかった。

2. クロ無病群の生産とクロ、メガイ病貝濾液での浸漬攻撃による感染試験

7月中旬での無病群の生残率は、94.1%であり、組織学的な病変も観察されなかったため、無病貝が生産できたと考えられた。また、受精卵感染実験群、クロおよびメガイ病貝濾液に無病稚貝を浸漬感染させた群の生残率は、それぞれ92, 88, 97%であり、組織学的にも病変が観察されなかったため、感染は成立しなかったものと考えられた。

3. メガイ無病群の生産とクロ、メガイ病貝濾液での浸漬攻撃による感染試験

8月下旬での無病群の生残率は、83%であり、時期的に集中した斃死は観察されなかった。また、組織学的に病変は観察されなかった。メガイの場合、病変はほとんど観察されないとされているものの、斃死状況と組織観察の結果から、無病稚貝が生産できたと考えられた。また、クロ、メガイ病貝濾液に無病稚貝を浸漬感染させた群の生残率は、それぞれ85%, 48%であった。後者の斃死原因が水質悪化であることが確認されたこと、および前者の斃死状況が無病稚貝と同様であったことより、感染は成立しなかったものと考えられた。

*詳細は、平成7年度地域特産種量産放流技術開発事業報告書（大量斃死要因調査グループ）を参照のこと。